

たまい場つうしん

第7号

—大人も子どもも気軽に立ち寄ってお茶のみ話に花が咲く、そんな地域の公民館をめざして名づけました—

白梅の名物となった 「食育講座」 って？



カマドを囲んで、世代間の交流
「熱いぞ!」「もうちょっと下がれ」などという声が聞こえてきそうです。

〇ゆでまんじゅうとお抹茶体験

去る九月二十六日(日)、恒例となった行事「ゆでまんじゅうとお抹茶体験」が、白梅会館の裏庭で行われました。

福生の畑で収穫した小麦粉をゆずってもらい、この地域で、昔から「おやつ」として家庭で作られてきた、素朴な「ゆでまんじゅう」を作ります。中に入れる「あんこ」は、前の日に、熊川在住の森屋さんが、白梅会館の給湯室で約二時間かけてじっくり煮てくれました。同じく、熊川在住の森田さん宅から、カマド、大釜、大鍋、竹杓子、コネ鉢など滅多に見られない道具を借りました。また、薪(まきは、やはり熊川在住の、別の森田さんに提供してもらいました。

当日は、昨日までの冷たい雨が嘘のような秋晴れとなりました。白梅会館の裏庭に設置したカマドに大釜をかけてマキを燃やしました。薪が燃えるところを初めて見た、という子どもがたくさんいました。

火の番、まんじゅうづくりなどを、白梅で活動しているサークルの方たちが、参加した親子に手ほどきしました。三百個近くのまんじゅうを作るうちに、小さな子どもも上手に丸められるようになりました。

その後、自分たちで作ったゆでまんじゅうを二階の和室に持っていき、茶道サークルの方たちが点てたお抹茶と一緒にいただきました。

お抹茶体験 エプロン姿の女の子がかしこまって、じっとお点前を見ています

参加した子どもは、二歳から小学校四年生、大人は、三十代から八十代まで、総勢四十五人ほどが、まさに老若男女が、交じり合って、この体験を楽しみました。初めて参加したAさん(七十代女性)は、「よその子も、初めての人もまるで親戚のようになってすごく楽しかった。」と感想を述べていました。

この地域で、ごく普通に行われてきたこと・まんじゅうづくり、カマドで火を燃やす・などが、今では遠いものとなりま



白梅の裏庭の畑に、今年6月に植え付けたサツマイモ。暑い夏を越えて、今ではすっかり葉が生い茂り、11月の収穫を待っているところです

した。薪を燃やす光景など、昭和生まれの者にとっては、懐かしい匂いと共に思い出す中でしか見られないものです。

白梅の食育講座は、このように、代々行なわれてきた「日常的なこと」を、地域の方たちに教えてもらいながら、次の世代に伝えていこう、ということを実践してききました。今年で五年目になります。

「ゆでまんじゅうとお抹茶体験」のほかにも、さつまいも体験(植え付けから観察、収穫までとそれを使ったさつま団子づくり)、すりだしうどん体験、味噌づくり、食器も自分で作ろうということで親子陶芸教室など、先代の知恵に学んで、改めて「食」について考え、さらに学んだ例が次に教える側に回り、絶やすことなく伝承していく仕組みづくりをしています。

なかなか味わえない体験ができるということで、リピーターも増えました。昭和の香りが漂う、白梅名物「食育講座」を一度体験してみてください。